

再臨のキリストによる
第2福音書

ヘルメスの杖・上

—小錬金術—

THE GOSPEL
BY CHRIST OF
THE SECOND COMING *No.2*

CADUCEUS

first volume

II

SEIDOU 正道
SEIDON

目次

小錬金術

第2福音書 3

全体の目次 4

座標 5 自我の確立

(1) 男性原理の極点 7

(2) 個性の確立 9

(3) 合理性の確立 13

(4) 良識の確立 17

(5) 契約関係の成立 20

(6) 神の体のヘソ 23

分化から総合へ

(1) 混在から分化へ 29

(2) 分化から総合へ 32

座標 5,1 アルベド侵入の起点

(1) 心のなかの客観 37

(2) 迷いと解決 41

小鍊金術

第2福音書

再臨のキリストによる
第2福音書

ヘルメスの杖・上

——小錬金術

自我は個人の歴史的経過のうちに見えてくる、つまり発見されるということである。

マイヤー『意識』
氏原寛訳より

II 自我の確立と、新たな進展の兆し
(座標 5～座標 5,1)

全体の目次

序 杖を持った神

座標 1 混在的一者

男性原理と女性原理

座標 2 教育の初期

座標 3 教育の中期

座標 4 教育の後期

座標 5 自我の確立

分化から総合へ

座標 5.1

アルベド侵入の起点

座標 6

アルベド侵入の初期

座標 7

アルベド侵入の中期

座標 8

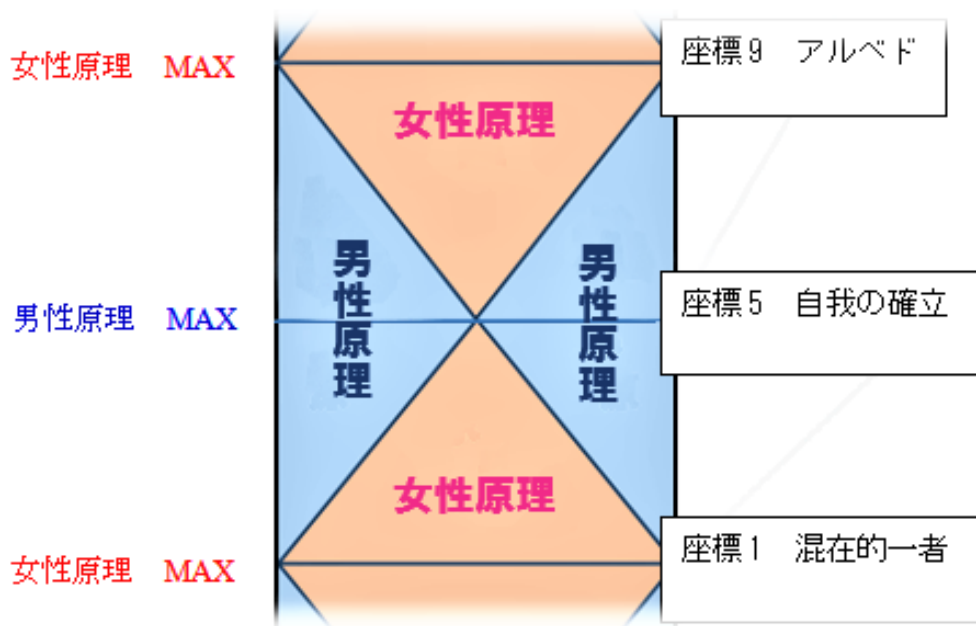
アルベド侵入の後期

根源苦とニグレド

座標 8.9 恩寵の原理

座標5 自我の確立

(1) 男性原理の極点



2022-11-27.png

混在的一者のアンチテーゼ

女性原理に支配されていた混在的一者（座標1）においては、主体は、母親と溶け合っ
て——母親に包摂されるスタイルでもって——彼女と一体化していた。

妊婦の状態では肉体的に「二人で一人」であったし、胎外妊娠期間では心理的に「二
人で一人」であった。

つまり彼らは、強力な女性原理によって一つに「結びつけられて」いたのである。女
性原理とは「結びつけること」だからである。

本座標であつかう「自我の確立」段階は、その混在的一者のアンチテーゼである。ア
ンチテーゼとは、前提となるものの“正反対のもの”のことだ。

だからこの場合、それは第一に、自我の確立段階が、「女性原理がマックスの状態である混在的一者とは真逆の、男性原理がマックスな状態」であることを示している。そして第二に、そこでは、「結びつけることと反対の“分けること”が強調されている」ことが予想される。男性原理とは「分けること」だからである。

二元的世界観

男性原理の徹底は、二元的な世界観によって表現される。二元的であるとは、それらが「二つの相容れない原理によって構成されている」ということだ。

つまり、そこに「根本的に違う」ものが二つ並ぶわけである。何かを徹底的に「分けること」が成就したならば、結局、事態はそのようにならざるを得ないだろう。

これを「自我の確立」に到った主体の認識として表すと、「自分」と「自分以外のもの」という図式になる。

この「自分以外のもの」を、他者の総体であるところの「共同体」と考えてもよい。

つまりそのとき、まず主体のなかで、徹底的に「自分」というものが精錬、凝縮される。そして他方の「自分以外のもの」は、主体によって、徹底的に「自己外部」へと押しやられてしまうのである。擬人化して言うならば、

「これは自分だが、それ以外は自分とは違うものである。絶対に一緒にしないでくれ」

といった具合だ。

かくして主体によって「二元的な世界観」が表出されることになる。このことについては、ある程度「教育の後期」でも言及した。

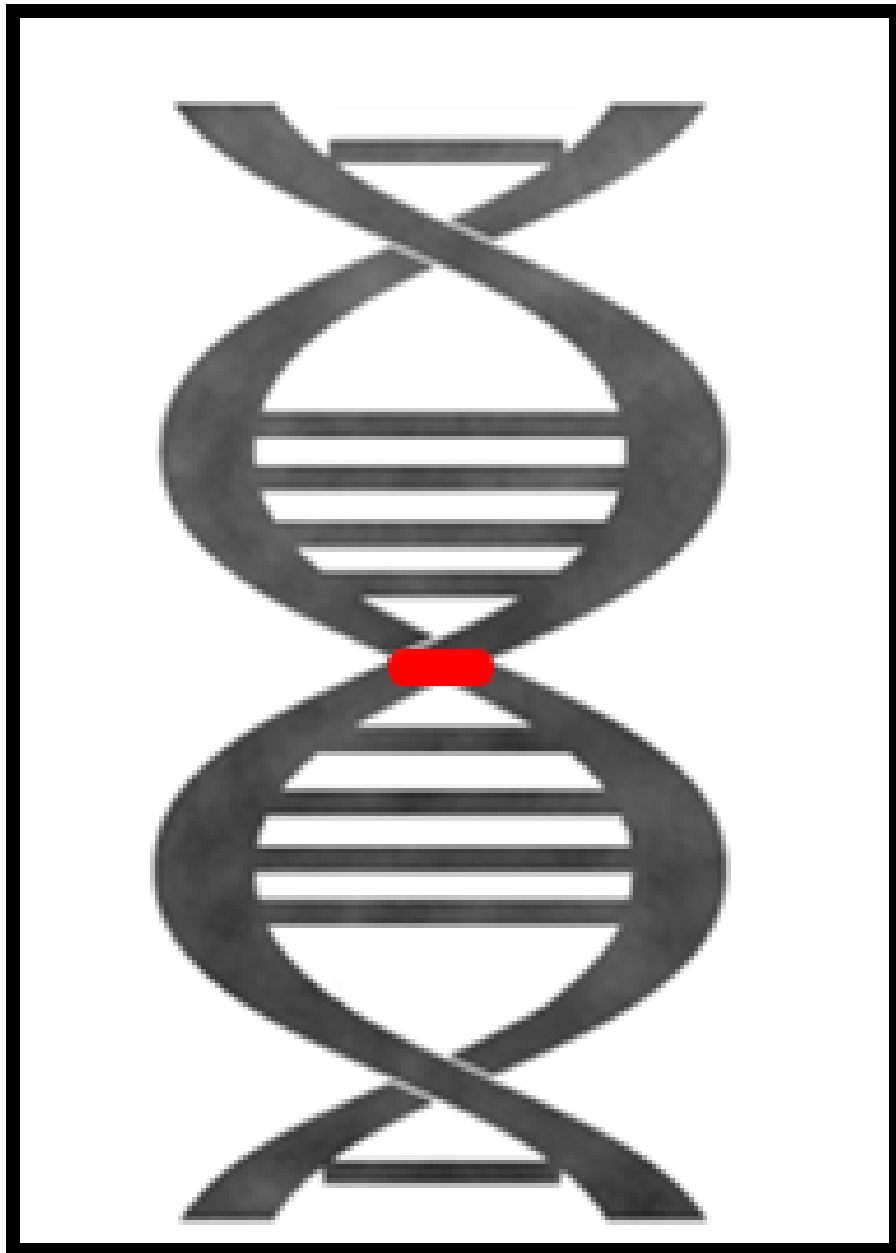
すなわち「教育の後期」のテーマを錬金術的に表現すると――

「ドロドロのペーストを蒸留することによって、混在していた元素を引き離し、混じりけのない諸元素を抽出する」ということになるだろう。(中略)

[そうなる]、ここには「ある特定の元素」と「それ以外の元素」という対比が見られる。これはそこに「二元的な世界観」が現出しているということである――

しかし、教育の後期は、その状態を作り出すための努力期間であり、自我の確立は、その努力の達成、または成就である。そこに自ずと、両者の違いが現れ出てくるだろう。

(2) 個性の確立



2022-11-22 \ (11 \).png

自他二元

空間的に見ると、二元的世界観は「自他二元」として現れてくる。

自他の“自”とは主体自身のことであり、もっと明確に言えば、主体の個性のことである。そして一方の“他”とは、他人たちの総称である共同体のことである。

少しだけ振り返っておこう。個性は、模倣行為への集中によって獲得された。

共同体のうちにある規範を模倣して、その規範に追いつくところまで行って、そのとき初めて得られる違和感、そこに主体の個性の萌芽がある。

そして、その違和感を克服するために、自身の「この場合、自分ならばこうしたい」という欲求に従うのが次の段階だ。

その結果得られた「自分の志向、好みはこういったものである」という確信、あるいは自負——これに対して自己責任を取れるようになれば、そこで「主体の個性は確立された」と言ってよいだろう。

もっとも、基本的に個性は「自分で認識するもの」というより、どちらかという「他人によって認識されるもの」である。

むしろ「自分とはこういう人間だ」と、あまりに言いきってしまえる人の個性は、眉唾ものでさえある。

こうした場合「その個性とやらは、彼の『作為的な自己演出』ではあるまいか」と疑う必要さえ出てくるだろう。

本物の個性とはそういうものではない。主体は、ただ自然に振舞っているだけなのに、それが他人の目には、強烈な個性の顕れとして映る。そうした状況が、たいがい本物の個性の表出なのである。

同一化状態の無責任さ

個性の確立者には、その確立していることを教える、明確な指標が存在する。それが「脱同一化」と「脱手段化」である。

順を追うため、まずは脱がつかない、その元々の状態について説明しよう。

同一化とは「主体が他人の意見のなかで生き、他人に依存し、まるで主体が他人のようになっている」ような心理状態をいう。つまり同一化とは「他人との同一化」なのだ。

他人に依存し、他人に影響されている分、当然ながら彼の「そこに自己責任を感受する性情」は後退している。

したがって、なにか都合の悪いことがあれば、それは常に他人のせいということになる。不思議なことだが、自己の責任の所在が、つねに「他人」にあるのである。

だが思い出してみよ。かの混在的一者では、乳児（主体）の責任はすべて母親（他人）が担っていた。だから「同一化」の状態とは、その当時の延長線にある、いまだ幼稚性

を残した相似形だと言えるだろう。言うまでもないが、こうなると自他二元など、どこへやら、だ。

つまり傍から見れば、どう鼻眞目に見ても主体が悪いのに、不思議なぐらい彼自身は、それを「自分は知ったことじゃない」と思うのである。それは主体にとっては、疑うまでもなく「誰かのせい」なのだ。

また、他人と同一化しているだけに、いつも「だって皆やっているのだから」が彼の“心の中での”口癖である。

そのため彼は、そのまま悪いほうへ“皆”と一緒に突き進むこともある。つまり実際に“皆”もろとも、法律によって裁かれるところまで行くことがある。

その際も、彼はきつと「皆がやっていたことを自分もやっただけだ。だから自分は悪くない」と言い張るだろう。すなわち彼は、心理的に、徹底的に自己責任を取らないということである。

総じて彼には、無責任と責任転嫁という特徴がみられる。自分の失敗や未熟をすぐに他人のせいにする人がいれば、その人は「同一化」の状態にあると考えられる。そういうことである。

手段化状態の身勝手さ

もう一つの「手段化」とは、他人を自分の“道具”のように使う性情である。つまり自分が何かを得たいと思ったとき、他人をその手段として利用するわけだ。それは、かつてカントという哲学者が語った、

「人格とは手段ではなく、それ自体が目的である」

という言葉の、まさに真逆をいく生き方だと言えるだろう。

他人を道具扱いするならば、その道具が自分の役に立たなくなった時点で、彼を傷つけようが、迷惑をかけようが、主体の良心は痛まなくなる。

極端な表現をすれば、手段化をしている主体にとっての“他人”とは「いらなくなったらポイ」できる程度の軽い存在なのである。

だから当然、捨てられて泣いている“他人”を見ても、主体の心はビクとも動かない。壊され捨てられている“他人”を見ても、主体の心は微塵も動かない。

つまり他人の心が傷ついていても、他人の体が傷ついていても、彼の心はまったく動揺しないのだ。かつての奴隷制の中で、主人が奴隷（＝道具）の境遇を憐れまなかったのと同じように。

もちろん現代に奴隷制はない。けれども、他人を奴隷のように取り扱う心情は、たしかに今も巷間に溢れている。そして、それこそが私のいう「手段化」の状態に他ならないのである。

脱同一化と脱手段化

以上、普通に生活していれば、どこにでも見られる「同一化」と「手段化」という心情について語った。

これは本当に、うんざりするほど日常的に目にすることが出来る、忌まわしき“心の景観”ではないだろうか。私自身——自己省察を含めて——毎日これを目にしている気がする。

しかし個性を確立している主体は、これら「同一化」と「手段化」から大部分は逃れている。

あるいは、そこからほとんど脱出している。だからこそ「脱同一化」と「脱手段化」が自他二元の指標となるのである。

すなわち、個性を確立している主体は、まず第一に、自分の個性を尊重するだろう。そして、それと同じぐらいに彼は、他人の個性をも、心からきちんと尊重するのである。

もっとも、そのとき、この“他人”が、実際に個性を確立しているかどうかは分からない。けれども主体は、そこに確立された個性があると仮定して、これを実在しているもののように尊重するのである。

そのため彼は、他人の心理領域に侵食されたり（＝同一化）、他人の心理領域を侵食したり（＝手段化）しない。彼にとって、あくまでも自分は自分、他人は他人なのである。そこには何よりも確かな線引きが為されてある。

したがって主体の個性は、まさしく他人（共同体）と二元的に分離しているのである。

(3) 合理性の確立

分析によって材料を得る

時間的に見ると、二元性は「真偽二元」として現れてくる。

真偽の真とは、主体が因果律によって再構成した共同体の情報であり、偽とは、その因果律に含まれなかった情報である。

といっても、真は、あるテーマに沿って形成されるだけの情報、つまり限定的な正統性しか持ちえない情報である。そのためテーマが変わるごとに、その構成要素もどんどん変わってってしまう。

すなわち、場合によっては、偽の範疇からも情報が選択される。その逆に、いったん真として扱われていた情報も、場合によっては、因果律の筋から外されることもあるわけだ。

ところで、そんな「真」を形成するためには、その前提として「分析」という操作が必要となる。

分析とは、物事を幾つかの構成要素に分けていくこと。そうしてそこに、構成要素の最小単位とも言える「素因」を浮かび上がらせることである。

つまり価値のある「因果律」の構成材料にするためには、それを「素因」レベルまで小さくしていかなければならないのだ。

これについて哲学者デカルトの言葉を借りるならば、「検討する難問の一つ一つを、できるだけ多くの、しかも問題をよりよく解くために必要なだけの小部分に分割すること」が必要なのである。この小部分の各々が、私のいう「素因」に他ならない。

真偽二元を構成する

そして、その「素因」を、因果律によって“正当に”並べたとき、それは「合理的な認識」と呼べるものとなる。それが合理性の確立ということであり、またそこに「真」が現出したということである。

そのさい、もともとの分析能力が徹底していれば、素因に雑味（不要情報）が混入する余地がなくなってくる。つまり、それだけ素因が“純正”になる訳である。

そして、この純正な素因によって因果律を構成すれば、その純正なぶんだけ、かかる因果律の「合理的な確度」が上がるだろう。むろん、それによって同時に、雑味、不要情報（＝偽）は、因果律の枠から締め出されることになる。

このときに成立するのが「真偽二元」である。言うなれば、別原理として峻別されている「真」と「偽」だ。

つまり、一方に合理性という「正当な因果律」があり、一方に偽という「因果律から取り残された不要情報」がある。そうした二分割的な状態をして、私は「真偽二元」と言っているのである。

このさい当然、主体の「分析する能力」と「因果律を構成する能力」が高いほど、真と偽は、より原理的に引き離されることになるだろう。

青かびを食べる娘

話が難しくなってしまったので、ここで、ちょっとした思い出話を挿入しておこう。

中学生の時、私は手塚治虫氏の漫画である『火の鳥・黎明編』を読んでいた。

これは日本の原始時代（神代の時代）の話なのだが、ここに破傷風の娘が登場する。破傷風とは、傷口からばい菌が入って引き起こされる、たいへん危険な病気である。

この破傷風を治すために、登場人物である医者がある娘に“青かび”を食べさせる。それによって娘は治癒するので、中学生の私は「青かびは一種の薬なのだろう」と思った。

ところが、この物語を読んだ直後に、私は学校の全体集会で、それと全く逆の話を聞くことになる。というのは、体育館のステージに上がった先生が、次のように言ったからだ。

「これから梅雨のシーズンに入ります。食品がカビやすくなりますので、決して青くなったパンなど食べないようにして下さい。食中毒の原因になります」

これを聞いて私は悩んだ。青かびとは、病人を健康にするものなのか。健康な人を病人にするものなのか、と。

ペニシリンの抽出

大人になってから、ようやく私は、この問題にカタをつけることが出来た。ここで必要だったのは、まさに分析と抽出だったのである。

すなわち、確実に病気を治したいならば、医師は青かびを成分分析し、そこに含まれる「ペニシリン」だけを抽出すべきだったのだ。

ペニシリンとは、1928年にイギリス人が青かびの中から発見した、史上初の抗生物質である。抗生物質とは、ばい菌を殺す薬のことだ。

この抗生物質ペニシリン（素因）を抽出できたならば、残りのカビ成分は、不要物と

して捨ててしまうのが最もよい。全体集会で言っていたように「それを食べて食中毒を起こしてしまわぬように」である。

よって、かの『火の鳥』においては、この純粋なペニシリンを“ただそれのみ”破傷風の娘に投与すればよかったのだ。

それによって娘は、より確実に、かの危険な病気から逃れていただろう。少なくとも現代においては、そういう治療が可能である。

真偽二元を成立させるために

それが出来ない原始時代の医師は、いわば賭けをしたのである。食べさせた青かびの“抗生物質としての役割”が勝つか、ばい菌の“病害成分としての役割”が勝つか、という賭けを。

前者が勝てば娘は治癒するし、後者が勝れば娘は重篤化する。そして、医師は“たまたま”その賭けに勝ったのである。

このように分析、抽出能力が低いと「抗生物質が破傷風を治す」という合理的因果律に、「ばい菌が病いを重篤化する」という“余分なもの”が混ざってしまう。

そして、それによって医師は、「賭け」などというものを、責任重大な「生殺与奪の判断」に持ち込まなければならなくなったのだ。およそ結果を曖昧にせざるを得ない「賭け」などというものを。

それは到底「自我的とは言えない」状況であろう。なぜなら「曖昧」とは、雑多なものが“結合”する、きわめて女性原理的な状態をさす言葉だからだ。

これは、もちろん“分けること”を本質とする、自我の男性原理的な状態とは、まったく相容れないものである。自我の段階は、あくまでも、女性原理を極力排した「男性原理がマックスの状態」でなければならない。

では、原始時代の医師とは、逆の場合ならどうなるだろう。

主体の男性原理的な分析、抽出能力が高まった場合。つまり、青かびから、ペニシリンを抽出できるというシチュエーションが成立したならば、である。

そのときの主体は、幸福にも、合理的な「抗生物質が破傷風を治す」という因果律（真）だけを自分のものに出来る。

そして、非合理的な「ばい菌が病いを重篤化する」という余分因子（偽）を、一切迷いなく破棄することが出来るのである。

そのように主体は、合理から非合理を排斥して、純然たる「真偽二元」を成立させることが出来る。これが際立って自我的な状態であることは、もはや言うまでもないだろう。

専門分化の背景

ただし、人間には限界というものがある。あまりにも多くの情報を前にしてしまうと、それを分析することや、分析によって生じた情報の素因を“正当に”並べたりすることに、すっかり疲弊してしまうのである。

これは、われわれ人間の「知的能力の限界性」を慮れば当然のことだろう。

しかし、自我の確立者にとって「合理的な認識をする」ことは、必須の思考様式、思考スタイルなのである。だから、そのスタイルだけは、第一義的に守らなければならない。

そこで彼のなかでは、必然的に「専門分化」ということが起こってくる。

専門分化——つまり、自我の確立者たちにあっては、その各人が「おのおの異なった分野における専門家」になっていくということである。

そのとき主体は、自分にとっての世界（知覚の守備範囲）を狭めることによって、彼が取りあつかう情報の量を制限する。

そのように情報が少なくなれば、主体の分析力は維持され、思考的な疲労感も少なくて済むからだ。また、その思考の結実としての「因果的正当性」のほうも、長期にわたって、高い正答率を維持できるようになるだろう。

もちろんそれは、帰結的に、主体の世界観を偏狭にせざるを得ない。場合によっては、そこに差別主義的で、偏屈な人格をつくる可能性もあるだろう。

しかし、自我の確立段階にある主体は、これを別に不都合とは思わない。

それというのも、ここには、ある意味で「自他二元」が現れているからだ。

すなわち彼には、自分にあてがわれた「専門分化された一分野」をして、これを「自分の個性のようなもの」として感じる事が出来るのである。つまり二元的に「自分の担当分野（自）」と「自分の担当以外のもの（他）」といった具合に分けてしまうのだ。

そのため主体は、むしろ自分が、一つの分野のスペシャリスト（専門家）である事実を心地よく感じる事だろう。場合によっては、その立場を誇りにさえ思うだろう。

このような理由から、合理性の確立者には、いわゆる「専門家」が多くなるのである。

(4) 良識の確立

善悪二元

倫理的に見ると、二元性は「善悪二元」として現れてくる。

結論から言うと、善悪の善とは、良識のことである。そして悪とは、主体の良識によって判断された「その場面で最適と思われる倫理性」から漏れ零れた、すべての倫理性である。

以上のことを説明するために、これから順を追って話をしていこう。

おさらいしておく、教育の後期で出てきた「遵法」とは、自主的に法律を守ろうとする精神であった。

けれども、その法律というものが、つねに正しいものであるという保証はない。法律という響きは大層なものだが、所詮それは、われわれ不完全な人間が、拵えたものに過ぎないからである。

つまり、人間が作ったものとしての限界性により、法律の中には、排除しきれない悪(誤謬)が含まれているのである。

その帰結として、ただ自主的に法律を守っているだけでは、恒常的には、善と悪とを峻別できない事になる。遵法一辺倒では、どこかの場面で、善悪二元性が破綻してしまうわけだ。

善悪二元性が破綻するとはどういう事だろう。

それは、弁別されて「善は善、悪は悪」と二つに離れているべき両者が、どこかで混じりあってしまう、という事である。法律をただ自主的に守っているだけでは、そのような状態を、どうしても避けられないということになる。

善そのものになれない法律の例

たとえば『日本国憲法』などは、その典型とすら言える。一般に憲法は、法律よりも上位にある倫理的規定であり、言うなれば「法律のなかの法律」である。

しかしながら、この日本国憲法を守っていれば、日本国民の安全と幸福が約束されるかと言えば、到底そうとは言えないだろう。

なにしろこの憲法たるや、そのまま施行されると、国防思想を骨抜きにして、どこぞの侵略国家に、丸腰の日本国をアッサリと差し出す効能があるのだからである。

というのも、その前文からして、すでに『日本国憲法』には、「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」という珍妙な文言があるのである。

これを日本の周辺国に敷衍すれば、結局「シナ（中国）や北朝鮮、韓国の公正さや信義の厚さを信用して、その“信用”に、わが国の安全保持の根拠を置く」ということである。

つまり、これらの国を信じる以上、武力を持つ必要はない。わが国は丸腰で構わない、というのが『日本国憲法』のモットーなのである。

理論的帰結としては、そういうことにならざるを得ない。

日本国憲法の低価値

しかし、シナや北朝鮮や韓国は、客観的にみて、どう考えても「公正な国」でもなければ「信用に値する国」でもない。

なにせ北朝鮮など、実際に、日本に向かってミサイルを、バンバン打っているのである。シナは領海侵犯を繰り返しているし、韓国は平気で日本との条約を破っている。これらの国の、一体どこに公正と信義があるのか？

現実がそうである以上、この時点で『日本国憲法』の内容は、その価値の大半を失っているのではないだろうか。

したがって、そのような憲法を遵守することが、倫理的に見て、純粋に正しいはずもない。

かくも『日本国憲法』における善悪二元の破綻は明らかであり——先取りして言う——まさしく、この憲法は、良識によって書き改められる必要があるのだ。

もっとも『日本国憲法』の護持死守を訴える人々は、おそらく単純に「いまだ良識の段階に達していない」という訳ではないのだろう。

彼らはもっと積極的に、意図的に、日本を「シナや北朝鮮や韓国への貢ぎ物」にしたくて策謀を重ねているのだ。私にはそのようにしか見えないのである。

イエスによる良識の表現

ところで、二千年前のイスラエルでは、モーセの「律法」が、わが国の『日本国憲法』に相当していた。いや、ユダヤ人にとってのそれは、日本の憲法などよりも、ずっと重い、絶対的な法律だったと言ってよいだろう。

その律法によって定められている安息日（強制休日）に対して、イエスは次のように言っている。

安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。

『マルコによる福音書』より

これこそは良識の言葉である。

休みの日に良いことをして何が悪いのか？ とイエスは問う。

何も悪くない。それが世界的視野から見たときの良識的判断である。論ずるのも馬鹿馬鹿しいほど当たり前のことである。

しかし旧約聖書を通読すれば、イエスがどんなに大きな勇気をもって、先に掲げた言葉を語ったかが分かる。何と言っても、ユダヤ国家の律法において安息日は、絶対の絶対の絶対ぐらいの重要性を持っているからである。

だから律法の遵守者（あるいは服従者）たちは、イエスを徹底的な「侮蔑と憎悪」の眼差しでもって睨みつける。神の教えをないがしろにする不届きものとして責め立てる。

しかしイエスはたじろがない。そこに良識者としての「正しさへの確信」があるからだ。

法律を超え出る良識

そのように、本当の正しさのためには、現行の法律という壁さえも、突き崩そうとするのが、真の「良識」というものである。

だからそれは、法律からの復讐（罰則）に対しても、敢然と立ち向かう。最後の最後まで屈しようとしなない。

イエスにしても、結局は命を賭して戦ったし、哲学者のソクラテスもそうだったろう。二人とも罰則から逃れようとせず、あえて自分自身の死刑をすら受け容れたのだった。

となれば、それはまさに、命がけの「自己責任をとること」の顕れだったと言えよう。

そのようにして、良識の確立者にあっては、自分が判断する「善」「その場に最適な倫理性」以外のものは、すべて、その善という枠組みの“外側”に押しやられることになる。

飽くまでも外側に。たとえそれが、人々から承認を受けている「法律」であっても。

そして主体自身は、周りから無法者と呼ばれようとも、あくまでも善の権化（良識者）として、その場面場面を生きるのである。

法律の内側で働いていた「遵法」では峻別できなかった善悪。それがこうして、法律の外側に超え出た「良識」によって峻別されることになる。

それこそ善悪二元の達成であり、同時に、主体の倫理的自我が、確立したことを告げる徴表でもある。

あらためて言おう。いま主体は、倫理的自我である「良識」を確立したのである。

(5) 契約関係の成立

最低限の結びつき

自我の確立段階は、男性原理優位の極限状態である。それゆえ分化の極みでもあるが、この分化は、かろうじて分散や散逸といった、人間性の逸脱状態からは逃れている。

もしも、自我の確立段階に、男性原理しか存在しなかったならば、たしかに人間の自我は、その各々が遠く散逸しあっていたであろう。それにより人類は「単なる孤独者の集積」になっていたかもしれない。

しかし、主体はあくまでも「人間」である。人間は、男であろうと女であろうと、男性原理と女性原理の両方を持ち合わせている。

たしかに個人によって、その割合は変わるだろう。だがそうだとすると、人間が人間であるならば、彼は必ずや男女両方の原理を、その心身に内在させているのである。

つまり「自我の確立段階」の場合、共同体（社会）において、いくら男性原理が強調されようとも、そこでは“それでもなお”女性原理が、ひっそりと影のように働き続けているのだ。

振り返ってみれば、女性原理優位の極点である「混在的一者」にしても、逆の意味で同じだった。一者化していると言いつつも、そこで母親と乳児という要素は、物的には明らかに分離していた。

そればかりではない。二身一体ともいえる妊婦の状態にあつてさえ、無理やりになれば、その母体と胎児とを引き離すことだって出来たのだ。つまり中絶することが出来た。

となれば、そこでも最低限の男性原理（＝分けること）は働いていたのだ。それが強力な女性原理によって、心理的、肉体的に覆い隠されていた、というのが、混在的一者の“隠された”構図なのである。

結局、人間であるかぎり、原理そのものにはなりきらない。そういうことだ。

契約関係について

では、話を「自我の確立」段階に戻そう。

そこでは当然、分化を生業とする男性原理が主導的に働いている。しかし主体（主体たち）は人間であるので、いちおう最低限度の「結びつけること」は執り行われる。

つまりは、そこに僅かながら女性原理が働くということである。じつに最低限度にして希薄、なんとも味気ない程度の結びつきではあるけれども。

それこそが「契約関係」である。

この契約関係は、ほとんど書面的とも言える人間関係だ。

すなわち「文書によって確認がとれた場合にのみ、自我同士のギブ・アンド・テイクが“正式なもの”として保証される」という代物なのだ。

このような人間味のない人間関係は——近現代においては——訴訟社会であるアメリカにおいて、目立って発達した。

しかし、その精神の淵源は、神との契約を自らの宗教とした、古代のユダヤ人たちに遡るだろう。

それだからキリスト教圏においては、「ユダヤ教に還れ」という意味合いを持っていたプロテスタントたちが、契約思想の担い手になったのである。そして、もともとアメリカは、このプロテスタントたちが開拓した国であった。

日本でも、最近ではそのアメリカナイズ（アメリカ化）によって、ずいぶん契約文書、注意書きの類が増えてきた。

それというのも、書面確認された上での、契約履行が正義、契約不履行が悪、というのが、基本的な自我の立場だからである。

それだけに、このスタイルが浸透してきた現代日本では、「近頃は、何をするにしても、文章説明とサインが必要なんだな」

と面倒臭がっている人も多いのではないだろうか。

近代化の宿命

実際、多くの人々が違和感を拭えないでいるなか、それでも日本は、どんどん契約社会化している。しょせん自我を確立している人など稀なのだから、人々の「契約思想に対する違和感」を一掃することは、まず無理だろう。

しかし、それでも現代社会は、明らかに「自我の確立」を目的にして、そのシステムを日々更新していつている。言ってしまうと、それが近代化の宿命だからである。近代化とはまさに、自我の確立を、社会全体が目指すことに他ならないのである。

ルターが登場し、ヨーロッパの近代化が始まってから、もう五百年ぐらいにはなるだろうか。

植民地主義による文化伝播の過程をへて、アジアもまた、ヨーロッパと同じく近代化の道を歩んでいった。

その間、人間は熟さずとも、人間の文化（社会）は、その試行錯誤の積み重ねによって、ずいぶん成熟してきたのだと思う。日本を含めて、先進国とよばれる国々では、社会が「自我の確立」的になってきたようだ。

それだけに現代では、共同体に適應する（＝教育の中期のテーマ）だけで、人がかなり「自我の確立」に近づけるようになった。それが芯のない、疑似的なものであることは否めないにしてもである。たしかに時代は進歩したのだろう。

ついでに言うておくと、男女関係ですら、結婚となれば契約関係である。

よって、当人同士の感情よりも、たった一枚の書面のほうが、そこでは、男女を結束

的に縛るのに力があると言わざるを得ない。

ここに契約関係の「素っ気なさ」と「確実さ」が両方とも、よく表れている。

(6) 神の体のヘソ

上下シンメトリーの中央

これまで見てきた「自我の確立」段階は、人間の体で喩えると、まさに「ヘソ」にあたる。つまり体の中心点にあたる訳だ。

そして、混在的一者の座標で述べたように、錬金術の根本経典である『エメラルド板』には、次のような言葉が遺されている。

一なるものの奇跡を成し遂げるにあたっては、下にあるものは上にあるものの如く、上にあるものは下にあるものの如し。

これを図形的に言い換えれば「中心となるどこかを折り目にして、そこから上下のシンメトリー構図が描かれることになる」ということだ。

そして、ヘルメスの杖のなかで、その折り目はどこかと探していけば、私たちはどうしても「自我の確立」の段階に導かれることになる。

結論としては「ヘルメスの杖は、自我の確立段階を中心線にして、そこから上下にシンメトリーを描く」ということだ。

はっきり言っておくが、ここに私の恣意はない。これはまさに「自動的にそうなった」のであって、私にとっても、予測すら不可能なことだった。

神の肢体

私の思惑などお構いなしに、ヘルメスの杖は、自我の確立段階を折り目にしたとき、見事なまでに上下対称の図を描くことになる。

どうか簡易的に表した座標図を眺めてほしい。



教育の段階はアルペド侵入に、混在的一者はアルペド（総合的一者）に、ニグレド（虚

無)は、ルベド(虚無からの存在の創造)に、それぞれ重なり合う。

まだ説明が及んでいない語句も出したが、べつに、いま詳細な理解を求めている訳ではないのだ。今は何となく座標図を眺めて、それぞれの座標の位置を確認していただければ充分である。

その上で、この美しいまでに整った上下シンメトリーを、胸に刻んでいただきたい。言うなれば、これは「神の肢体」なのだから。

本当に不思議なことだが、自我の確立段階以外では——つまり他のいかなる座標を折り目にしても——このようなシンメトリーは描かれない。それだけに私などは「自我というものは、本当に重要なファクターなのだ」と、しみじみ感じ入ってしまう。

それというのも、普段「アルベド」だの「ルベド」だのを中心にして思索をしていると、ついつい自我の確立などは、なおざりになってしまうからだ。

しかし、その実、ここそが神の体の中心でありヘソなのである。であるならば、その重要性にも、計り知れないものがあるのだろう。

似て非なる上下

シンメトリーであるからには、向きを合わせれば、上下にある図は完全に重なり合う。

しかし、上下の対称物は、そのように酷似はしていても同一ではない。いわば似て非なるものである。

あるいは、器は同じものを使っているけれども、中に入っているものは別といったところか。

喩えるなら、混在的一者のコップに入っているのは氷、アルベドのコップに入っているのは蒸気である。またニグレド(虚無)の皿に載っているのは炭、ルベドの皿に載っているのはダイヤモンドである。

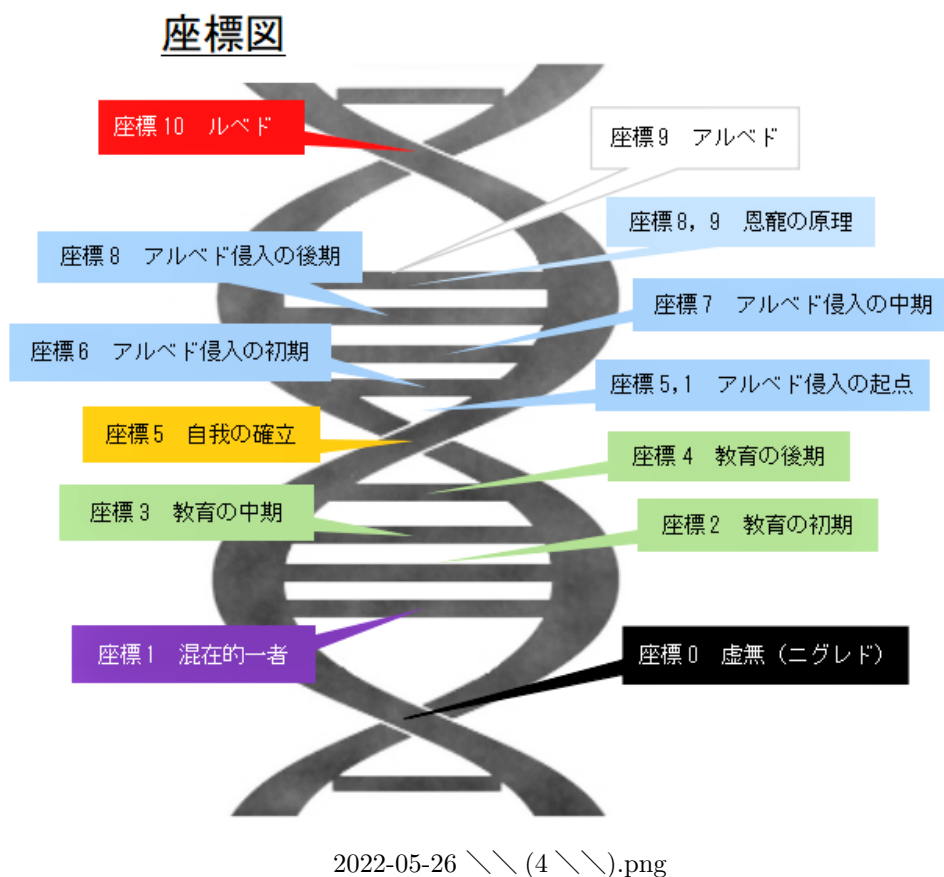
氷と蒸気は、同じ水分子の相転移でしかないし、炭とダイヤモンドは、同じ元素の結合の仕方の違いにすぎない。しかし、氷と蒸気の働きかたは全く違だし、炭とダイヤモンドの価値には雲泥の差があるだろう。

ヘルメスの杖におけるシンメトリーにも、これと同じような「同一性」と「働きや価値の違い」の両方が付きまとうことになる。

その内実を知ってもらうためには、やや難解になるとしても、これより先の座標の描写にも、付き合ってもらおうしかあるまい。

分化から総合へ

(1) 混在から分化へ



アルベド侵入に入る前に

座標図を確認してもらえれば分かるとおり、次の座標から、私たちは「アルベド侵入」の領域に入っていくことになる。

しかし、その前に「アルベド侵入」についての序文として、ここで、少しばかり概観的な話をしておこう。主題となるのは「混在→分化→総合」という大きな流れである。

アンドレーア・アロマティコは、その著『錬金術』で、錬金作業を、だいたい次のように要約している。

* まずカオス状態にある物質を手に入れ、それを純化し（中略）物質を形作っているさまざまな要素を分離し、分類してから、もう一度調和のとれた形で統一し直さなければならない。これが物質を賢者の石に変える霊的作業である。

アンドレーア・アロマティコ『錬金術』種村季弘監修より*

これを箇条書きにすれば下記のようなになるだろう。

- 1, まずカオス状態にある物質を手に入れる。
- 2, それを蒸留によって純化し、物質を形作っているさまざまな要素を分離、分類する。
- 3, そうしてから、もう一度、分離した各要素を「調和のとれた形」でもって統一し直す。

次に、上の箇条書きを、私なりに展開してみることにする。

座標5までを振り返る

- 1, まずカオス状態にある物質を手に入れる。

カオス状態にある物質とは、やや具体的に言えば「材料を混ぜて熱した、ドロドロのペースト」のことである。本書で言えば、座標1の「混在的一者」にあたる。

すなわち母と子の未分化結合状態だ。まさにカオスであり、これは女性原理（結びつけること）の最初のマックス状態だと言えるだろう。

- 2, それを蒸留によって純化し、物質を形作っているさまざまな要素を分離、分類する。

ドロドロのペースト状だった母子の意識が、男性原理の干渉（父親の登場）によって分離しはじめる。そのとき主体（子）は、おぼろげながらも、母とずっと一緒ではいられない自分を認めることになる。

不可避である危険を覚悟して、主体は広い世界へと足を踏み出す。これが座標2の「教育の初期」である。

つぎに“広い世界”たる「共同体」に適応することによって、主体は共同体の情報を保持する能力者となる。これが座標3である「教育の中期」での出来事である。

しかし、それは同時に、主体を「共同体の模倣体」にしてしまうことでもあった。それは結局「主体が共同体と未分化である」ということである。

そこで主体は、さらなる“分離、分化”を求めなければならなくなる。

彼は集中、因果律、遵法によって自主性を磨く。その蒸留的研鑽の中で「自分という要素」を浮かび上がらせるために。このあたりまでが、座標4の「教育の後期」にあたるだろう。

そして、ついに主体は「自我の確立段階」にいたる。座標5に至って主体の努力は報われ、ようやく彼が目指していたこと、つまり自分が自分であることが成就する。

主体は、いまや彼の独自要素であるところの「自分」でしかなくなった。よって、それ以外の“余剰分”は、自分の外側へと除外してしまったことになる。

つまり主体は、共同体とさえ分離したのである。それはまさに男性原理（分けること）の最優勢による「分化の極み」だ。

そして、この分化が「二元性」という言葉によって、メルクマール（目印）的に表現される。

ただし、あくまでも人間であるところの主体は、契約関係によって、僅かながら共同体とのつながりを保ち続けている。それにより彼の分化は、他人との離散や散逸にまでは至ることがない。

(2) 分化から総合へ

座標 5.1 以降の世界

さて、前節のように“分化を極めた”主体にとっての次なる課題は、

3, そうして〔分離、分化して〕から、もう一度、分離した各要素を「調和のとれた形」でもって統一し直す。

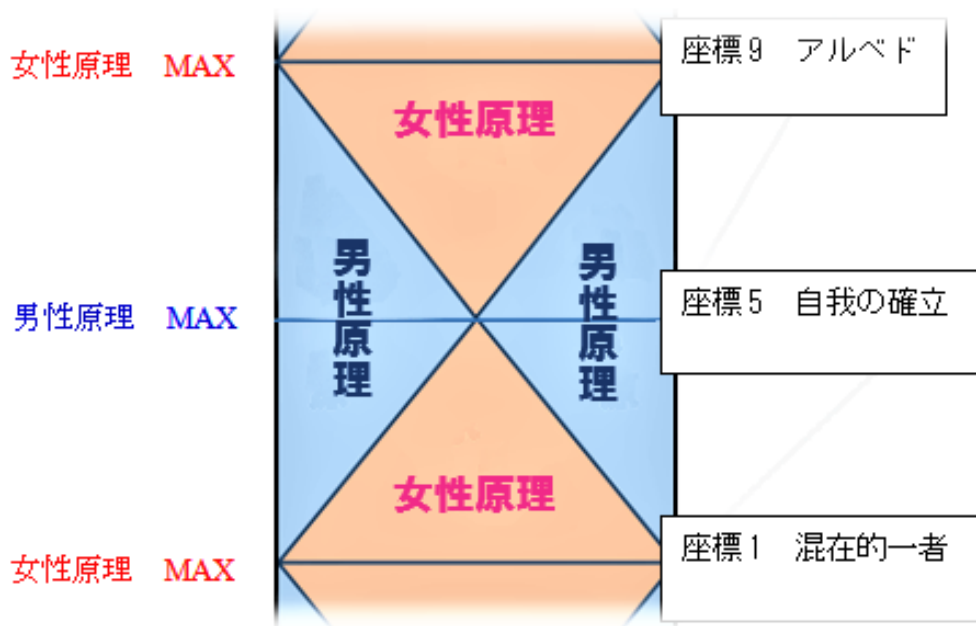
ということである。

この統一の取り組みが「アルベド侵入」であり、その取り組みが進展していく姿が、アルベド侵入の、初期、中期、後期、ということになる。

そしてまた、その統一の「完全なる実現」が、座標9のアルベド（アルベド自体）である。

女性原理の復活

ところで、すでに述べたとおり、座標図において、アルベドは、混在的一者と、上下のシンメトリーを描いている。そして今度は原理図を見れば分かるように、両者は、どちらも女性原理のマックス状態である。



2022-11-27.png

そして女性原理とは「結びつけること」であった。そのためアルベドは、女性原理の権化となって、離れていたものを、一つに結び付けずにはおかない。それは言わば、彼女の本来の“さが”である。

この彼女の性は、混在的一者では、母と子を結びつけるために大いに発揮された。肉体的にも、心理的にも、である。それは読者も覚えておいでだろう。

けれども、自我の確立を中心とした、男性原理優勢の座標では、その「結びつけること」がほとんど沈潜化してしまっていた。目に見えなくなってしまう。そこでは徹底した分化、分離が、主体の課題だったからである。

しかし、それが実際の「分化の極限」を経て、大きな変化を見せることになる。

すなわち、ついに女性原理が、ふたたび力をその盛り返すのである。座標 5.1 以降にあって、彼女の「結びつける」という性は、また大いに力をふるうことになる。

したがってアロマティコの言う「調和のとれた形での統一のし直し」という、一種の「結びつけること」の黒幕は、まさしく彼女（女性原理）であると言っていいだろう。

混在と総合の違い

よって座標 5.1 以降では「女性原理によって」、かつて分離していたものが統合されることになる。

しかし混在的の一時とは異なり、この場面では、結びつけられるべき諸要素が、かつての母や息子よりも、ずっと自身の特徴（個性）を際立たせている。

それは当然のことだろう。かつては胎児や乳児だった主体も、教育の段階における蒸留的作業を繰り返すことによって、いまや心身ともに、立派な大人になっているのだから。

今では彼は「他の何者でもない自分」というほどにも、特徴的な「個性」や「自我」を意識している。そのような意識を、胎児や乳幼児の「曖昧で未分化な意識」と比べたら、その差異性において本当に、天と地ほどの差があるだろう。

そして、曖昧であるものに「適材適所」は存在しないが、際立った特徴を持ったものには「適材適所」を適用することが出来る。

ならば複数の自我を“適材適所的に”結びつけたらどうなるだろう。つまり、複数の自我を“統一”したらどうなるだろう。

そのとき現れる様相は、もはや「混在状態」などとは絶対に呼べないものである。そこには区分と結合とが、両立的に揃っているからである。

つまり、たくさんのもものが寄り集まっても、それらが一切混じり合わずに、整然と組み合わさっているのである。

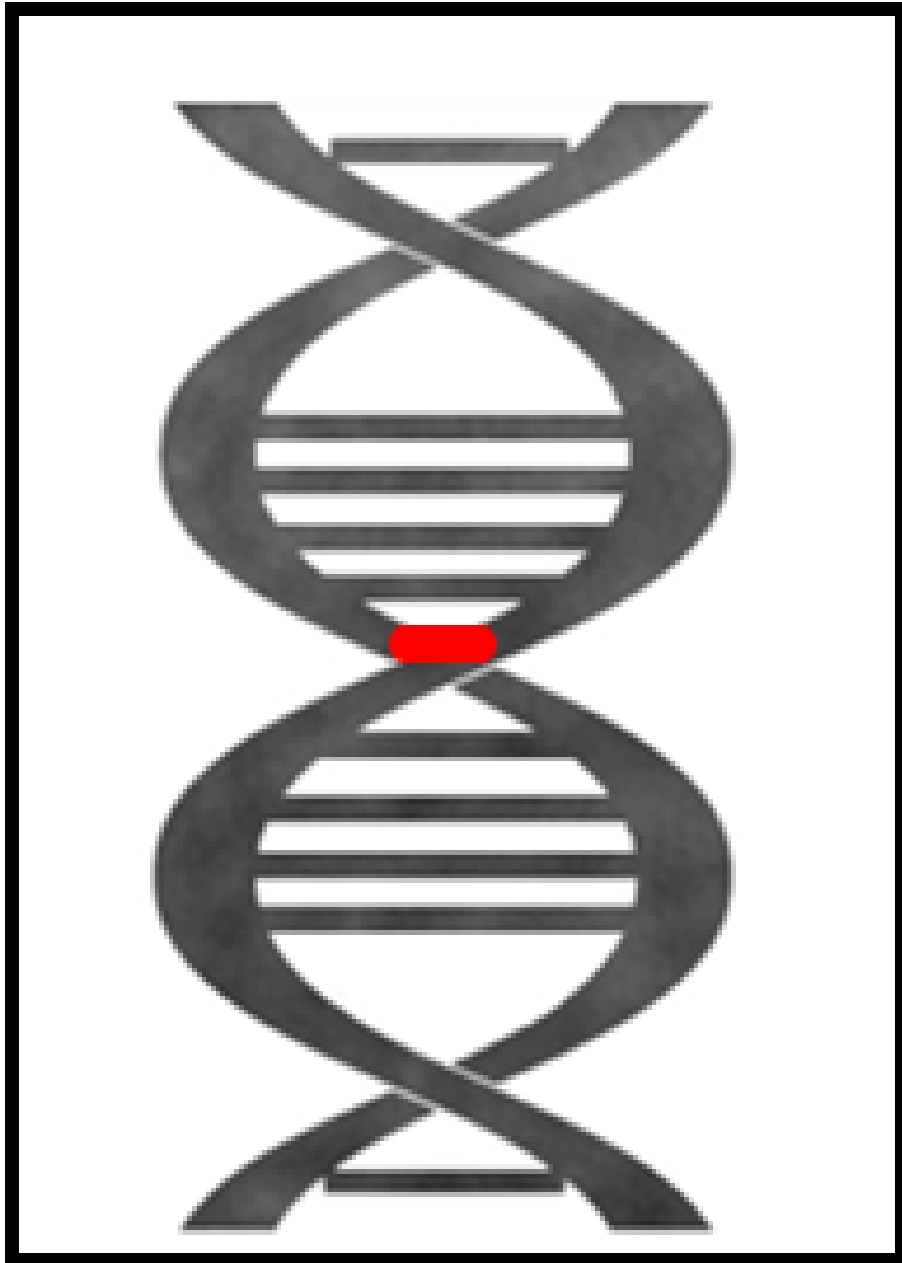
それこそは「調和がとれた形での統一」であり、アロマティコが最終的に求めた、第三の状態である。

そして「混在的」と対照的なものとして、私たちは、この状態を「総合的」と呼んで然るべきではないだろうか。総合とは、まさに「調和がとれた形での統一」のことだからだ。

これが、私がアルベドをして、それを時に「総合的一者」と呼ぶゆえんである。

座標 5,1 アルベド侵入の起点

(1) 心のなかの客観



2022-11-22 \ (12 \).png

主観と客観

私たちは、自分の心のことを「主観」と呼ぶことがある。それは「私にとっての物の見方」ということだから、たしかに「私の心」に近い概念だろう。

だが私たちは「客観性」も持たなければならない。客観性を欠いた人間、すなわち私情に流されることの多い人間は、そのとき社会側（客観的世界）からこう通告されるからだ、

「あなたは社会的な公平さを持っていない。よって、大勢の人間が共存して生きる、この世界に所属することは困難だ」と。

そのように批判され、罰則を課せられ、ついに彼は、共同体からアッサリと除去されてしまう。会社から解雇されたり、場合によっては刑務所に入れられたりする。そのように悲しむべき事態に至ってしまうのである。

もとより人間は、社会的な生き物である。だから私たちは、自分の心を、人々が存在する“外側”に向けようとする。

むろん、そこにあるのは「どうにも自分の思い通りにならない」客観的な世界ではあろう。あるいは、私たちに不自由ばかりを押し付けてくる、いとも厄介で面倒な世界であらう。

しかし、それでもなお私たちは、そこで生きるために「共同体のルール」を学ぼうとする。それ以外に、私たちの生きていく手段はないからだ。よってこれは、どうしても逃れることの出来ない、私たちが生きていくにあたっての“宿命”なのである。

ということは、ここまでのことを簡単に取りまとめると、まず、
「心の内側には主観があり、心の外側には客観的世界がある」

ということになる。そして、それを踏まえたうえで、
「客観的世界を知るためには、私たちは自分の心を、自分の外側に向けなければならない」
ということになるだろう。

常識が壊れるとき

しかし、自我の確立段階を経て「アルベド侵入の起点」に立ったとき、そのような常識的な考えは、音を立てて崩れていってしまう。

なぜなら彼は、そのとき自分の心の内側に「客観的世界」があるのを見つけるからだ。すなわち主体は、主観でしかないはずの“自分の心の中”に、その主観ではあり得ないものを見つけることになるのである。

それはまさに「自分の意志ではコントロールできない」客観的な世界である。

そして、そのような世界があるという主体の感覚は、絶対に「気の迷い」などではありえない。

なぜなら、それは主体には「まるで肌に触れるかのように確かなもの」「疑う余地もな

く厳然と存在しているもの」として感じられるものだからである。

これは本当に不思議なことだと思う。何とも不可思議な感覚を与えられることだと思う。ときには戸惑いの極致ともなることだと思う。

繰り返すが、それまで主体は、自分の心のなかには「主観」だけがあると思っていたのだ。彼はそれを信じて疑わなかった。

ところが実際には、そこには「客観」までもがあったのである。自分のコントロールが効かない世界が、自分の心の中に厳然としてあったのである。

そのように、心の外側にしかないと思っていた「客観的世界」が、心の中にもあったとなると、これは一体どういうことになるのだろうか。

自分が自分でない感覚

その詳しいメカニズムについては、おいおい語っていくことにしよう。ここでは、もう少し、主体の戸惑いについての心理描写を付け足しておきたい。

となると、そのとき主体の身に降りかかってくるのは、「自分はこうしたいから、こうする」という、ごく当然の行動様式では全くない。そこで起こるのは、「自分では想定できなかったことが、たしかに自分の手によって為される」

という、まったくもって不可解な行動様式なのである。

それは言うなれば「自分が自分でない」という感覚をもたらす現象と言えよう。さらに言えば「自分が、何者かに操られている」かのような感覚さえもたらす現象である。

それゆえ主体は、このとき「どうして自分に、このようなことが出来たのだろう」と、狐につままれたような表情でもって、独りごちざるを得ない。

失敗ではなく成功として

もっとも、それまでの主体であっても、失敗やアウト・オブ・コントロールとして「自分では思いもしなかった事をしてしまう」ことはあった。

アウト・オブ・コントロールとは要するに、自己制御が出来ない状態のことだ。

すなわち「アルベド侵入の起点」に立つ前の、「自我の確立」段階や、それより前の段階にあった主体であっても、そういうことは時おり起こったのである。

だいいち、たいがいの失敗というものは、まさに「自分のコントロールを離れた自分」が引き起こすものだ。これは、とりわけ教育の段階にあるような、自律性が低い主体の身の上に、よく起こることであろう。

だが、それは心理学者のフロイトが、100年以上も前に発表した「個人的無意識」の学説によって説明できる事である。

実際、彼の学説を学べば、そこに不思議なことは何もないと言っていい。それは少な

くとも、主体の能力の“範囲内”の出来事ではない。

それに対して「アルベド侵入の起点」から始まる現象は、明らかに、主体の能力の“範囲外”の出来事なのである。

すなわち、それは「偉大な成功体験」なのだ。それは失敗ではなく“成功”を呼び込むのである。

要するに主体の「心の中の客観によって引き起こされる」現象が——つまり主体の「与り知らぬ」現象が——主体の想定をも超える“成功”を、その主体の元へともたらすのである。

したがってそれは、フロイトの学説で説明される「失敗事例」などとは、とうてい次元が異なってくる。それは、そんなものより、ずっとずっと“大規模で高次の”偉大な出来事なのである。

それは「自分で行うことが、自分の能力の限界を超えて、優れた結果をもたらす」という、積極的な摩訶不思議さを備えている。

つまりそれは「失敗を呼び込むアウト・オブ・コントロール」ではなく、「成功と優秀さを呼び込むアウト・オブ・コントロール」なのである。

(2) 迷いと解決

アルベド侵入の起点というジレンマ

少し振り返って「自我の確立」の段階を見てみよう。

自我の確立とは、人間が自主的に為しうる自己規定、自己認識、倫理判断の上限である。

それゆえ主体は、いかなる自主的努力によっても、これ以上の意識のステージに登ることは出来ない。それは理論上「そのようにしかならない」ことだと言ってよろしい。

しかし、自我の確立段階まで至った今、主体は人間のままである。

それに反して、序説で述べたとおり、「ヘルメスの杖」は、いわば「人間の地平と、神の視座をむすぶ梯子」なのである。

そして、すべての人間は、神の視座に至るまで、この梯子を登りきる義務を負っている。座標図を見ても、梯子（座標）は、まだ6, 7, 8, 9, 10という段を残している。

ということは、本書における「主体の成長の描写」が、こんなところでストップしてしまう筈はないのだ。当然のように主体は、これ以後も、より高い意識のステージに向かって梯子を登ってゆくことになる、そういうことである。

そうでなければ理に叶わない。たとえ主体が「自我の確立」に至ったとしても、彼には、さらなる成長の過程が与えられなければならないのだ。

そうやって与えられなければならない……のだけれども、彼には、自主的に自己を成長させる手立てがない。なにせ、その自主性の限界点が、かの「自我の確立」の段階だったのだから。

これが「アルベド侵入の起点」と私が呼んでいる状態である。

それは一つのジレンマ（迷い）であり、アンチノミー（二律背反）である。

二律背反とは、妥当する二つの命題が、たがいに矛盾状態を作っているさまを言う。ここでは「主体が成長義務を持っていること」と「主体が成長手段を持っていないこと」がアンチノミーの関係にある。

アルベド侵入という解決

そして、このジレンマやアンチノミーを解決するものこそが、「アルベド侵入」なのだ。

このアルベド侵入こそが、「自主性の限界点に立ったことで、成長の手段を奪われてしまった主体」のもとに訪れる天祐、すなわち“天からの助け”なのである。

アルベド侵入は「心の奥底から」「内的客観として」主体の意識に助力を与える。そのように主体は、自主性ではなく「助力」によって今後の成長を支えて“もらう”のだ。

このようなアルベド侵入は、主体の成長にとって、まさしく内的な「助け船」と言えよう。

ただし読者には、もしかしたら、ここで使われている「侵入」という言葉に、若干の抵抗を感じる向きがあるかもしれない。何者かに侵入される、という文章には、たしかに、いくぶんかの穏当でない空気が含まれているからだ。

しかし、私が「侵入」という言葉を使ったのは、アルベド侵入の具体的な現われが、いわゆるインスピレーション（靈感、閃き）だからである。そして、このインスピレーションという言葉の原意は「吹き込まれたもの」という形容に他ならない。

つまり主体側にとっては、インスピレーションとは、外部から自分に吹き込んでくる何か、つまり「何者かの侵入」にあたるのだ。それで私は、これを「アルベド侵入」と呼ぶことにしたのである。

では、実際には“何が”主体の心に侵入してくるのだろう。

その答えは「アルベド侵入」という言葉のうちに、すでに示されている。アルベド・の・侵入。つまり主体の心に侵入してくるの、他でもない「アルベド」なのである。

アルベドとは何か

アルベドそのものについては、座標9の章において、ある程度しっかりと考察する。ある程度、というのは、この『ヘルメスの杖』自体が、私の神学にとって、ダイジェスト版、簡略版の意味合いを持っているからである。

だから本章では、もともと簡略にしか表現しないつもりを、さらに簡略化して表現することになる。そうであるからには私は、ここでは読者が「何となく」話が分かってくれれば御の字だと思っている。

そうした意図のもとに「アルベド」を言い表すと、それは「無限、永遠、救済」ということになるだろう。

無限、永遠、救済——それは多くの宗教にとっての最奥義であり、ほとんど神そのものと言っても差し支えない。実際、神とは無限を司る永遠の存在で、かつ全ての人間を救済する者なのではないだろうか。

とすれば、アルベドとは、それほどにも普遍的で、偉大なものなのである。

そして私が「アルベド侵入」と言うとき、それは、この神に近い概念が、主体の心に侵入してくることを指している。

よってそれは、極めて強力な「助け船」であると言えるだろう。ならば私たちは、その助力に、大きな期待を寄せてもよさそうである。

テリトリーを持つアルベド

ところがアルベドは「そこでしか純粋に自分を保つことが出来ない」というテリトリーを持っている。テリトリーとは縄張りのことである。

そして座標9が、まさにその「アルベドのテリトリー」にあたるのだ。したがって、この座標9に定位しないことには、アルベドはその十全性を保つことが出来ないことになる。

けれども「アルベド侵入の受けとり手である主体」は当然、この座標9にはいない。もう少し正確に言えば、主体は座標9に、その意識を定位していない。主体の意識は、いまのところ座標の6～8にあるはずだ。

ということは、アルベド侵入としてのアルベドの内容は、どうしても、その本来の十全性を低減していることになる。それは、テリトリーを離れてしまったアルベドの宿命である。

すなわち「無限、永遠、救済」は、いまや「なかば無限的なもの、なかば永遠的なもの、なかば救済的なもの」となってしまったのである。

アルベド侵入の濃度

もっとも、アルベド侵入にも「教育の段階」と同様の階梯がある。つまり、初期、中期、後期の三区に分だ。したがって、一口に「十全性の低減」と言っても、そこに該当レベルによる程度の差が出てくるのは当然である。

たとえば言うと、まず座標9にあるアルベドを「本人」と考えたとする。

すると、親族としての“血の濃さ”はアルベド侵入の後期ぐらいで「弟」、中期ぐらいで「子」といったところだろう。

そしてアルベド侵入の初期にいたっては、もはや「孫」ぐらいにしか、その血の濃さを残していないのである。

このあたりの事情に通じている、アヴィラの聖テレジアは、その著書『完徳の道』で次のように言っている。

この溢れる泉（アルベド自体）から大小の川が流れ出ますが、時として主が〔孫のような〕子供たちすなわち初心者にお振り当てになるのは、わずかな糸のような細い流れに過ぎません。大量の水は初心者を恐れさせますから、これで充分なのです。

つまり、アルベド自体を溢れる湧水に例えるならば、「アルベド侵入の初期」に割り当てられるのは、糸のように細い水流ぐらいでしかない、ということである。

ところで、聖テレジアが「主」と呼んでいるのは、もちろん主イエス・キリストのこ

とである。しかしここでは、その主を「アルペド自体の擬人化」と考えても差し支えな
いだろう。

テレジア自身、この二者を分けて考えていないことは、その著書を読めば、明々白々
であるからだ。

再臨のキリストによる福音書 2-II

著 正道

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
